

読書指導についての一考察

国語科 井 上 雅 登

目 次

I	はじめに	2
II	実践のねらい	3
III	読書推進の過程で	8
IV	成果と課題	9

要 旨

中学校学習指導要領の「読むこと」に関する指導については、「目的や意図に応じた的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てるようにすること。その際、広く言語文化についての関心を深めるようにしたり、日常生活における読書活動が活発に行われるようにしたりすること。」と記されている。しかしながら、実際に現場では、「話すこと・聞くこと」に重点が置かれ、「読むこと」については軽んじられている傾向があるような気がしてならない。「文学」についての扱いも各社国語教科書の内容を鑑みるに、その比重はかなりの小さいものととらえざるを得ない。このままでは、「読書に親しむ態度」が養われるとは到底思えないのであるがいかがなものであろうか。齋藤孝氏も『読書力』（岩波新書）の中で、「国語教育が文学教育になりすぎている批判も、従来よくなされてきた。しかし、現実には、文学教育も弱くなっている。自己形成としての読書は、読書の重要なテーマだ。私が考える読書力は、文学をまったく排除したものではあり得ない。純文学とは言わないまでも、人生のある時期に文庫に収められている様々な名作を読んでいることを、読書力の一条件としておきたい。」と述べているくらいである。

以上のことから、国語の授業において、あえて読書活動の場面設定を行うことで、生徒に読書に対する興味関心を持たせ、主体的に読書が進んで行われるようにするために、工夫を凝らしてみた。その取り組みの報告である。

I はじめに

近年、若者の読書離れが言われているが、果たして本当なのだろうか。真の意味での「読書離れ」ではなくて、ただ読書という行為にたどり着くまでのきっかけを子どもが持ち合わせていないだけではないだろうか。現に第50回学校読書調査では、5月1か月に読んだ平均冊数が、前回は2.8冊だったのが3.3冊に増加した。

中学生の読書冊数が増加したのは、『世界の中心で愛を叫ぶ』（片山恭一著 小学館）が広く読まれたことや、芥川賞の史上最年少受賞作品となった『蹴りたい背中』（綿矢りさ著 筑摩書房）『蛇にピアス』（金原ひとみ著 集英社）が大きく影響したと考えられる。中学生にとって素晴らしい作品に出会うことは大切なことである。一冊の本との出会いが、「読書」という生涯の親友を発見することにもなるはずだからである。

また、活字文化議員連盟は平成17年3月31日の総会で、国民の活字離れや若者の読解力不足の深刻化を受けて、「文字・活字文化振興法」の骨子案をまとめ、その中の「法施行に伴う施策の展開」において、「読書指導、読書の時間の確保」を挙げている。読書をする環境を作ることから、読書の楽しみを見出してもらおうという考えである。

以上のことから、読書の楽しみさえ見出すことができれば、どの生徒も読書をするようになるはずだと仮定した上で、そのきっかけ作りとして、意図的に授業の中で読書環境を設定してみることにした。

深川明子氏は、文学的文章を読むことについて、次のように述べている。

読むという行為は、読む主体者である生徒が読みの対象となる文学的文章と対話（相互作用）することによって新しい作品世界を創造していく協業作業である。対話に当たっては、生徒が教材文をどれだけ異化し、イメージ化できるかが重要である。（引用者—中略）作品世界はイメージの連続であり、それは生徒一人ひとりが創り上げるものであるが、その創造過程において生徒自身は自己の認識や感性を揺さぶられ、生徒自身の認識や感性が変容していく。また、イメージ化による作品世界が完結したとき、生徒はその作品の全体像と向き合って対話する。その対話は、作品世界として具象的に描かれた形象はどんな意味を持っているのか。そして、それは自分にとってどんな意味があるのかという自己との対話である。ここでもまた、自己の変容を迫られる。

（『国語教育実践講座』ニチブン 240ページ）

読書をするという行為そのものが「自己との対話」とおして、「自己の認識や感性を揺さぶられ」、「自己の変容」を生み出していくものである。本校の生徒には特にこのような機会が必要であると考えている。

Ⅱ 実践のねらい

まず、平成17年2月に本校で開催された公開研究発表会において実践した単元「小説を読むーあなたは恋愛と友情のどちらを選択しますかー」についての報告をする。

この単元では、1冊の小説をまるごと全部読ませることをきっかけにして、生徒が読書に興味関心を持ち、以前から本をよく読んでいた生徒についてはこれまで以上に、全く本を読むことをしない読書嫌いの生徒については、わずかに1冊からだけでも読書しようとする積極的な気持ちになるようにという期待をこめて授業を展開した。

授業を一つのきっかけ作りと考えているわけであるから、その題材についてはかなりの時間をかけていくつかの候補の中から慎重に選んだつもりである。題材を武者小路実篤『友情』にしたのは、中学2年生という発達段階を考慮したこと、そして日常の生徒の様子を見た上でのことである。生徒が異性に興味を持ち始めたこともあり、女子が男子のうわさ話をしたりする行為が見られたりしたことからも、『友情』の内容はうってつけであると考えた。つまり、生徒が登場人物の心情をとらえやすいのではないかと考えたのである。

実際に行った授業展開は次のとおりである。

① 単元名 小説を読むーあなたは恋愛と友情のどちらを選択しますかー

武者小路実篤『友情』（新潮文庫）

② 単元のねらい

この単元に入る前に、本校の生徒（現在2年生135人が在籍、回答数128）の「読書」に対する考えを把握することを目的として読書アンケートを実施した。（実施時期 平成16年12月）アンケート内容とその結果は以下のとおりである。

（質問）

1 『走れメロス』の内容は面白かったですか。

ア 大変面白かった 38人

イ この作品のようなものなら読んでもいいと思った 66人

ウ たいして興味がわかなかった 24人

2 あなたは読書をするのが好きですか。

ア 読書をするのは好きである 100人

イ 読書をするのは好きではない 28人

3 あなたは『走れメロス』の学習後に読書に興味がわきましたか。

ア 読書をしてみたいと思うようになった 10人

イ 『走れメロス』の学習は関係なく、もともと読書に興味がある 90人

ウ 以前と変わらず、読書には興味がない 28人

4 あなたは先月1ヶ月(11月)だけで何冊本を読みましたか(マンガは除く)

ア () 冊読んだ 98人

イ 全く読んでいない 30人

5 本を読んだという人に聞きます。どのようなジャンルの本が好きですか。

(複数に○をつけてもよい)

ア ファンタジー	イ 推理小説	ウ 恋愛小説	エ 冒険小説	オ 時代小説
58人	52人	36人	53人	28人
カ エッセイ	キ 科学的読み物	ク 古典	ケ 絵本	コ その他
38人	13人	8人	16人	17人

6 今後において、授業でとりあげてほしい作品があれば書いて下さい。

以上の結果から読みとれることとして、約78%の生徒が「読書をするのが好き」と回答している。

この結果からみても、本校の大部分の生徒が、「読書」に関心をもっていることがわかる。11月に『走れメロス』に取り組んだ時、生徒たちは作品にのめり込んだ。『走れメロス』の授業では、主人公メロスがとった行動について考えさせたり、作者が仕組んだ様々な仕掛け(例えば、山賊を登場させることでどのような効果をもたらすか)や、この小説の中で作者が選び抜いて用いていることばにも着目させたのであるが、それらのことを考える場をとおして、自らの姿を主人公メロスに同化できたようであった。授業中ばかりではなく、休憩時間なども「メロスってさあ」と生徒どおしが作品の登場人物や、感想などを話している様子が見受けられた。指導者としては久しぶりに見る光景であり微笑ましいものであった。「『走れメロス』の学習後に読書に興味がわいたかどうか」の質問に対しては、読書に興味関心のなかった生徒で、約8%の生徒が「読書をしてみたいと思うようになった」と回答している。また、「あなたは先月1ヶ月(11月)だけで何冊本を読みましたか(マンガは除く)」については、読書に興味をもっている生徒でも、偶然に11月だけ読書しなかった生徒が存在する。さらには、5の質問については、『ハリーポッター』人気にあやかって、アの数が圧倒的に多いものと予想していたが、ア、イ、エが比較的多いというだけで、どのジャンルのものも読んでみたいという意欲が感じられる。

ただし普段の生徒の様子を観察していると、週間ランキングで示されている『ハリーポッタ

一』シリーズや『電車男』のような作品に興味をもち、楽しんで読んではいけるものの、純文学である『吾輩は猫である』『蜘蛛の糸』『伊豆の踊子』などの良さを知らず、そのまま通り過ぎていくように見える。前回『走れメロス』のように、これほどの作品自体に魅力のあるものを取りあげたことから、「今後もぜひ名作といわれるものを生徒たちに読ませたい」「小説を読むことの楽しさを感じてもらいたい」と強く感じたものである。

今回『友情』を取りあげることで、野島の親友である大宮が、「野島との友情」を選ぶのか、それとも「杉子の愛に応えること」を選ぶのか、大宮の立場で考えさせる一方で、それを考える材料となる箇所を課題として解決していくことで必然的に全体を読み深めていく授業展開にしたいと考えた。

③ 単元の展開（全5時間）

第1・2時 作者について説明。『友情』を黙読し、登場人物の整理をする。

第3時 次の展開を予想して書く。

第4時 第3時で書いた予想内容をもとにして、指導者が示した本文中の箇所を部分的に取りあげたものを課題として、登場人物の心情を掘り下げる。

学習者自身が考えた登場人物の心情を、隣の学習者と意見交換をして考えを深める。

（本時）

第5時 学習者側で課題を設定し、まずは自分自身で考えをもつ。その後、隣の学習者と意見交換をして考えを深める。

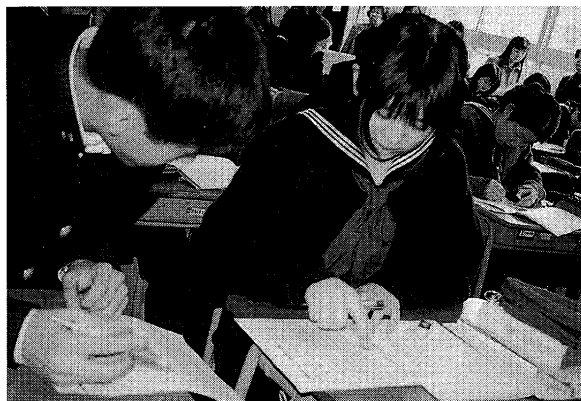
第3時、第4時にも記してあるように、授業を進めていくうえで、題材である『友情』の初めから終わりまで全部を一度に生徒に提示したわけではない。大きく四つに分けて、こまぎれ的にプリントにして配布した。つまり、このような形をとることによって、生徒は先が読めず、話の展開が見えないのである。（授業で読む以前に、すでに『友情』を読んでいた生徒は学年で1人だけ）そのことによって、生徒は自然と先を読みたいという意欲にかられることとなる。実際に、「先生、この先のプリント、いつくれるんですか？」と聞いてくる生徒がいたし、「早くこの後を読みたい」という生徒が大勢存在したことは事実である。

また、次のようにもしかけを作ってみた。『友情』の後半部分で、大宮と杉子との手紙のやりとりが記され、それを主人公の野島が見るという設定になっているのであるが、大宮の手紙の一部分を切り取って、どういう展開になるか生徒に考えさせてみた。果たして大宮は野島との友情を選択するのか、それとも杉子の愛に応えようとするのか、いずれになるかを考えさせたのである。展開を予想させ、その後で、続きはどうなっていたのかを生徒に提示する形をとった。

実際には「僕は何と返事していいかわかりません。僕は迷っています。」の後に、どのように文章が展開していくのか書かせてみることにした。ここから後は、大宮自身の決断が迫られる

場面でもあり、文章全体の山場であると言える箇所である。2つの選択肢の中のいずれかを決めるのはとても難しいという生徒もいた。大宮も「迷っています」と書いているくらいであるから、生徒が迷うのも仕方がない。それで「どうしてもというなら、一つに決めなくてもいいよ。」と指示しておいた。

生徒が予想した内容をもとにして、こちらが提示した課題を解決していき、さらには、隣に座っている生徒と意見交換をさせてみる。なぜ自分は展開を予想するにあたって、このような展開にしたのかということをじっくり考えさせてみる。このことによって、自分自身の「読み」に他人の「読み」が重なり、加わることで、独りよがりになりがちな「読み」の部分が広がっていく、また深まっていくことが考えられる。



二年国語学習プリント 小説を読む「友情」

二年()組()番 名前()

これまで読んできてわかったと思いますが、杉子は野島ではなく大宮に好意をもっており、大宮に気持ちよさげに手紙を出します。
大宮はこの後どのような行動をとるのでしょうか。「野島との友情」を選ぶのでしょうか、それとも「杉子の愛に応えること」を選ぶのでしょうか。大宮の返事に当たる部分の続きを書きましょう。

僕は何と返事していいかわかりません。僕は迷っています。

貴女のように美しい人が何故野島ではなく、僕をえらぶのか。僕は今は彼より死んでいるかもしれない。しかし、すぐに彼に征服されてしまうのに、貴女は、それでも僕に好意をよせてくれる。彼がいくら貴女に冷淡にしても、巴里に行き距離をとっても貴女は話しかけてくれました。

たしかに僕は野島と会ってから長い年月をかけて深い友情を生み出してきました。そして、彼が貴女へ好意を込めたという心から死んでしまえば、それは今でも愛わりありません。しかしその相手は貴女はかたがた、僕を愛してはくれなかった。理想という理由など、

貴女は僕の本当の愛を叶えてくれたことになるでしょう。それでも、もし一歩、うしろを打つて、僕を愛することができれば僕は貴女の好意に答えておきましょう。

野島にはこのことをつたえます。そして心から謝りたいと思います。許してはくれないでしょう。殺されてしまえばいい。それでも、貴女が理想を何もせず、僕を一人の男として受け入れてくれるのなら、僕は貴女を一人の女として受け入れよう。そして友人の野島を殺してあげよう。

今でも僕は野島は大切な友人です。考え直せるなら考え直してほしく、しかし今は、巴里へ来て僕に会うといいでしょう。もし貴女が来るのなら僕を待つていましょう。

それまでは、貴女を野島らしい所を探して下さい。僕も、貴女のすてきな所を探つていきますから。

最後に、授業を終えての生徒の感想を紹介する。

○ A子の場合（「愛と死」との関連性を考える）

題名と挿し絵にひかれて1年生の時に武者小路実篤の「愛と死」を読みました。この本は、「友情」と違い、主人公が外国に出かけている間に夏子という女性が亡くなるという話です。

「友情」を読んで思ったことは2つあります。1つ目は、話の始まりに少し登場する「村岡」という男性は「愛と死」の主人公ではないだろうかということです。つまり、「友情」と「愛と死」は実はつながっているのではないのでしょうか。村岡、野島、大宮は皆、脚本家、小説家志望、村岡の性格は、野島よりも大宮と似ていると思いますが、外国の画家や絵に興味を持ち、日本は西洋に負けていると感じています。そして、2つ目は、杉子と夏子の性格です。杉子はピンポンや歌が上手な女性として上篇に描かれていますが（まるで欠点がない）下篇を読むと、野島を尊敬していても好きになれないと大宮に手紙で伝え、野島には「どうぞあしからず。」と冷たい手紙を送るなど、表情には出さない裏の心情が描かれていることが分かります。それに比べ、夏子は宙返り、歌が上手な女性として描かれています。もしも夏子が杉子の立場だったら、杉子と同じような行動をとるかも知れませんが、2つの作品を読む限り、杉子の方が大人びて見えます。（私は夏子の方が好きです）

その他にも、外国の画家や絵に対してや愛に対しての村岡達の発言から、作者が西洋の文化に興味を持っていることや、愛に対しての考えを読みとることができました。同じ作家でも、主張したいことは同じです。同じことが書かれていればより主張したいことなのでしょう。（最後に、大宮のその後は「愛と死」なのかも知れません。）読書がより好きになってよかったです。

○ B子の場合

私は普段から本を読んでいるのですが、これは私にとって、書かれている文のことばかりして結構難しかったです。でも実は私、教科書の読書案内で書名が出ていて面白そうだったので、2年の最初の方に図書室で借りて1回手にしたことはあるのです。最初先生から、「友情」をやると言われた時、「もしや!？」とっていて、案の定、文章を読んでみたらそれでした。私が手にしたのは文庫ではなかったのですが、最初の2、3ページを読んで「なんだか現代文じゃないし、とっかかりにくいな。」とて、あの時は放棄していたのです。でも今回は授業で取り扱われていたので読まざるを得ません。私は今回途中で投げ捨ててしまった本と再会し、最後まで読むことができて達成感というような感じを味わえました。私はさっきも言ったように、電車の中でだけですが、一応読書を「日常化」させているので、「本が好きになったか」ということについては答えられません。でもいつもは、このような感じの小説は読んでいなかったもので、興味深さはありません。私は読むのがなぜか遅いので、家で残りも読んだり、読むことには苦は感じず、基本的には楽しませてもらったのだと思います。さて、本題に。友と愛。2つのある意味対照的なものもの間にはさまれた大宮。私は最初から大宮は好きではなく、どちらかというと嫌いでした。そしたらやはり嫌な人でした。

私は野島が偉い、そして可哀想、大宮は最低だと感じましたし、今でも強くそう思います。クラス中でも野島に同情の声は聞こえましたが、杉子や大宮へは非難の声が高まる一方でした。でも現実には井上先生がおっしゃったように、当時はそういうのはあってもおかしくない、逆に言えば「当たり前」だったのかとも思いますし、今だって、そういう事は起こり得ますし、起こっている。そう考えると、世の中ってのはかないなとつくづく感じさせられます。私はさっき、杉子や大宮を非難したばかりですが、一方で、実際そうだったら、と考えると、杉子のどうしても大宮と一緒にいたいという気持ちや、大宮の好きだから、いかにも両思いだからという気持ちは分かるのです。

きっと作者は、「世の中きれいな事(道徳的な事)ばかりではいかず、とてもはかないものなのだ。」という事を伝えたかったのではないかなと私は感じています。私は、野島と大宮はいつか必ず決闘をむかえる日が来て、互いに正面からぶつかり合う日が来る事を願い、また、信じています。そして、いつか2人もしくは3人で熱く長い戦いの後、山の頂上で互いに強い握手を交わす事を。野島はきっとそのために、これ以上ない苦しみや悲しみの中に身をおくことになったのでしょう。どちらが勝っても負けても、互いに納得できるくらいの強き自分と友との友情を深め合うことのできるその日のために。私が「友情」という名の本と「再会」したように、大宮と野島が「再会」する、その日のために。

Ⅲ 読書推進の過程で

その後も、年度末になるまで読書を続けてみた。生徒に読ませた作品は夏目漱石『こころ』、芥川龍之介『鼻』『羅生門』、星新一『ボッコちゃん』『おーいでてこーい』『包囲』、さくらももこ『さくらえび』である。さすがに『こころ』は高校で取り扱われているものであるだけに、文章内容の難しさを感じる生徒が多くいて、不満が多く出たのであるが、こちらとしても、一度は読んでもらいたいという作品であったので、あえて読ませてみたものである。

また、その他の作品については、生徒の実態に応じたもの、そしてぜひとも今読ませたいものという視点で選んだものである。大変好評であり、時間内に読みすすめていくことができた。ただし生徒全員を満足させるのはなかなか難しいことなので、純文学作品からそうでないものまで、様々なものを取り入れていく必要があると考えた。そして一つの作品につき、必ず課題を2つ用意し、読後に生徒それぞれに考えさせてみて、意見交換をさせてみた。短編集からだったものなので、早々と読み終えた生徒は課題をじっくり考えることができた。課題についての内容を隣に座っている生徒と意見交換をすることで、自分の考えが深まり、広がっていくに違いないと考えたのである。

国語学習プリント 小説を読む4 「羅生門」

二年()組()番 名前()

一 一二ページ「六分の恐怖と四分の好奇心」を具体的に書いて下さい。

老婆の屍骸の顔を覗きこむように眺めていた様子にこれから何をするのかと好奇心を持ったが、老婆に対しての恐怖の方が大きかった。

★屍骸に対する恐怖と何をしているのか？という好奇心

★何をしているのか？と好奇心を持ったが、老婆が怖くて恐怖を持った

二 一六ページ「下人の心には或勇氣が生まれて来た。」とありますが、「或勇氣」とは何でしょうか、書きましょう。

老婆が、餓死しないように屍骸の髪を抜いて髪にしようとしたのと同じように、下人も老婆を捕まえた時の激しい増悪とは逆の、盗人になろうという勇氣が生まれてきた。老婆を捕まえた時の正義感はなく、様子を登った時の盗人になろうとする気持ちが大きくなってきた。

★盗人になろうとする勇氣

★餓死しないように盗人になろうとする勇氣

IV 成果と課題

今回、読書指導の一環として、小説を授業中に生徒に読ませるということを進めてきた。

実際に行ってみて、私自身の新たな発見もあった。普段、私語で騒々しいクラスの生徒が、文学作品を読み始めた途端に水をうったように静かになる。作品にのめり込んでいる生徒の様子はまさに驚嘆に値するものである。それぞれの作品が放つ力(作品力)がこのような状態を生み出しているのだと思う。本来生徒は読書が好きなのだとということがわかる。

授業を受けてみての生徒の感想の中にも、「今回の国語の学習は新鮮味があって楽しめた。みんなと同じ本を読み、それについて深く話し合うという事は、他の人とのふれ合いにもなるし、その一冊の本について悩んだり、発見が生まれたりして、自分がいつも家などで一人で読んでいる時とは大違いで、こういう楽しみ方も本にはあるんだなと思いました。」という生徒や、「様々な個性をもつ本を読んでみて、価値観の違いや独特の表現方法などを学びました。」「この授業のおかげで3月だけで、昨年読んだ本の数を超えました。」「本のタイトルは知っていて、読んでみたかったけどなかなか読めなかったという本もあったので本当によかったです。」「前

に読んだことのある作品も多かったが、改めて読むと前に気づかなかったような所に気づいたり、作者のメッセージがわかったりして良かった。作者の心情を考えたり、その身のまわりの環境を考えたりすると、裏が読めそうな気がした。」というようにいずれの生徒もプラスの評価をしてくれている。

作品力とともに、作品を読む切り込み口を示してあげることによって、作品に対する興味もますます増えていくことであろう。

今後においては、朝読書の推進はもちろんのこと、学校司書との連携での授業を取り入れていくことで、読書が日常的に行われるような学校づくりを目指したいと考える。